



☆ ☆

保育者の立場

堀合文子

☆ ☆

教師が、幼児の中に入り共にあそぶことは、人と人、心と心の接触であり、無言のうちに精神指導ができる。教師の一言一句、一挙一動は幼児の心に頭に浸透していく。

また教師側も、幼児の中に入ることにより、幼児の個性にふれ、その幼児の性格、行動が理解できるし、指導の機会にふれる。上方で幼児のあそびをながめているだけでは、その幼児の本当の姿にはふれられず、また指導する機会も逃がしてしまい、教師の主觀や、幼児のうつたえで判断した指導しかできない。

このことは、種々の指導を具体的にどうするとかの問題を考える前の根本問題で、前の事がスムースになされることは、すべてを解決してくれるし、またその源をつくる。

○遊びの中に計画を

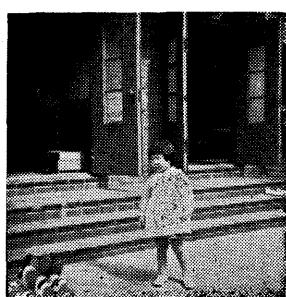
入園当初、家庭からはじめて経験する社会生活に幼児は目をみは

つたり、興奮したり、よろこんだり、不安がつたり、さまざまである。

そういう幼児を手にした私共は、各人各様の幼児を手にし、どうしようと思う。あそびが大切、とばかり入園当初、名前もまだわからない時に毎日毎日ちらばして自由にあそばせるのは、管理上、安全上、不適当である。

教師も、幼児も互に、自分の先生、自分の幼児と顔しりになるのが先決で、入園当初その努力をすることは言うまでもないことである。

その頃の教師のあそびは、幼児を引きつけ、あきさせず、教師が、ことばはわるいが、幼児を引きすりまわしている形である。が、日一日と増すごとに、幼児は自発性を押さえられず、友だちと遊んだり、ひとりで遊んだり、個々の生活にむかって邁進していく。それをまた教師の元に引っぱりこもうとするのでそこに無理がおき、幼児は欲望を押さえ、思わしからぬがまん強さを發揮しなければならなくなってしまう。



このところが天下分け目で、大いに友だちのあそびを助長させるか、教育形態にはめこむかの境だと思う。年令によつてもちがうが、日に日に友だち関係は発達し、また教師も、教師が中心になってあそばせるより、次第に友だち同志あそ

ぶ方向へむけていきたいので、そのためにはからの教師の努力が始まられるわけである。

友だち関係はもちろん、個人差もひどく、どんどんあそび始める人、教師の手にしつかりつながっている人、それもできずにただひとりで立っている人さまざまである。

そこで教師は、一日も早くみんなが友だちとあそべるように、時には教師が率先してあそびを提供してあそんだり、あそべない人とあそんでやったり、友だちの間へ入れてもらったり、教師の行動は忙しい。

幼稚園のどこにも友だちはいる。すぐ隣りにも遠くにも、その中一言、二言と……友だち関係が生じてくる。とその幼児のところはそつとぬけだし次の幼児の場をつくる。このように教師は仲介になる。ただ、幼児を引きつれてあそぶのではなく、あそんでやったり、相手になつたり、幼児を觀察し、そつとしておいたり、とても忙しい。

このようなくりかえしが続くが、幼児の興味持続は入園当初ほど淡いので、教師はそのつなぎにみんなと歌つたり、お話をきかせたりなどなどする。

一応、教師の目標は幼稚園になれ、友だちと遊べるようにとのことが大きく、これが一応例外はあつても、できてこないと、いろいろの教師の計画が折り込まれていかれない。もちろん計画はすすめていけばよいが、やはり一堂にあつめて一っぱひとからげの指導になってしまう。

それで、年長でも一学期は殆んど目標はここにあり、毎日毎日一

日中あそんで終る日が続くのが当然で、これが将来指導の基礎となるのである。

いつごろまで……というはその時の児童の状態でちがう。早く友だち関係のできる時と、なかなかうまくゆかぬ時と、一定しないし、また決められるものではない。

日によりとてもうまくいく日と、全く教師にばかりくついていためな日もあり、これのくりかえして進歩していく。

また、これが完成される日が来るわけでもなく、もちろん、小学校までもこれは続く。が、或る程度、よくあそべるようになつた時、教師は少しのグループより教師の計画をすすめ、グループ交代させたり、個人の交代で計画を流していく。

これも日によるので、教師が今日はこれをやろうと計画し、いきごんでもいても、児童のあそびがさかんな時、中断してまで教師の計画を遂行する必要のない場合がおこり、一日中児童の生活をそのままおいておくことがある。

「一日中遊んで」とあきれる人がいるかもしれないが、その遊びは貴重なあそびで将来いろいろの経験をすすんでしていく源になるのである。

教師にとっては、らくでない。目にみえない大なる努力が必要でむしろ大切な事である。

教師の計画が自然のうちに児童の中に折り込まれる日と、何か障りがあつて思



う半分もできない日もある。このような日をくりかえしていく中に、児童は児童の生活をたのしく生活していて、教師は教師の計画をその中に折り込んでゆく事がスムーズに行なわれるようになる。

○こぼれ

教師の計画にもれる人は、との心配が考えられるかも知れないが、それは考えるだけであつて事実ありえない。はじめ、自分の自発的活動に毎日むちゅうで教師の計画に参加しようとしている児童もあるが、教師の助言や、誘導で強制することなく、その児童より自発的に参加するようになる。これには教師の目にみえないたいへんな努力がそこにある。こぼれができてしまうのは一つは教師の技術によるといつてもよいであろう。

「いや」でも参加しなければならない形態におかれ日日を過ごし、自発的でもなく、習慣的に参加する方が教師は、らくで、みた目も皆徹底しているようだが、その個人は皆教師の権力に圧迫されている。

入園児童を、児童の自発的活動を尊重しながら教師の計画を折り込んでゆくのは、むしろ教師にとって外観の教育効果はないが、児童教育の心ある理解者は当然こうあるべき児童期を理解できると思う。

教師にとっては、らくでない。目にみえない大なる努力が必要であるが、私共はこの大切な児童期を、将来のために適切かつ、将来ある指導をしたいものである。

そのためには何の、ほねおしみをするやである。